学内学術研究発表会発表要旨

小山義政の乱に関する一考察

大塚秀哉

はじめに

平安時代に下野国衙を掌握し、小山氏は鎌倉時代に自然恩沢の守護として特別な存在であった。また、源氏・平氏と並ぶ秀郷流藤原氏の中心的な存在であったこともあり、その存在は中世の東国史を考える上で重要であると思われる。

本発表で取り上げる小山義政の乱は、東国全体に大きな影響を与えている。従来、この小山義政の乱に関しては膨大な研究業績が蓄積されてきた。

まず、小山義政の乱について取り扱ったものとして磯貝富士男氏の研究[1]が挙げられる。氏は従来言及されてきた乱の原因に関する説の整理・検討を行っている。次の三点を取り扱った。また、鎌倉府は、小山義政が内乱過程で集積した所領の削減・没収に意を注いだことを論じている。そして、円覚寺文書に所収されている三通の関東管領奉書を検討し、その文書中の宛所で宇都宮基綱の受領名が下野守であったことから、それがもとで両者が軍事的衝突に至ったことを論じられている。

次に乱の原因の一つであるとされている小山義政と宇都宮基綱の武力衝突を論じたものとして、次のような研究業績が挙げられる。市村高男氏は、百姓レベルでの対立に、下野支配をめぐる小山・宇都宮の対立が結びつき、抗争に

発展したと述べられている[2]。その後、江田郁夫氏は、鎌倉府は、宇都宮基綱に小山義政と同時期に下野守を名乗ることなどを認めることにより、小山氏・宇都宮両氏の対立を助長した可能性を指摘している[3]。また、鎌倉府と室町幕府との関係に着目した研究として、小国浩寿氏・杉山一弥氏の研究が挙げられる。小国氏は康暦の政変における鎌倉府・幕府の関係悪化の中で、公方氏満が基盤強化のため、幕府とのつながりがある小山氏を攻撃対象としたと述べられている[4]。杉山氏は上杉禅秀の乱、永享の乱といった十五世紀における東国の騒乱と同様に、鎌倉府と室町幕府との間には深い関わりが論じられている[5]。

小山氏・宇都宮氏の武力衝突の原因に関する考察や乱当時の鎌倉府と室町幕府との関係などが論じられているが、合戦を鎌倉時代からの勢力を誇っている領主と鎌倉府の衝突という側面での考察は充分ではない。そこで、小山義政の乱の経過を整理していき、この乱が、鎌倉府に与えた影響に関して考えていきたい。

第一章、小山義政の乱について

小山義政の乱は、小山義政と宇都宮基綱の下野国茂原での争いが発端となり、合戦が始まる。第一次討伐では、康暦二年（一三八〇）六月十五日に鎌倉府の軍勢が進発する。この軍勢が、辿った経路は、武蔵府中から村岡へと到る経路である。その後、佐野の天明から岩船を経て、祇園城を中心に小山氏側と鎌倉府側の戦闘が行われている。第二次討伐は、第一次討伐と同様に武蔵府中・村岡を経て、天明、岩船と侵攻している。その後、児玉塚に陣を置きながら進み、本沢河原で合戦となる。その後、鷲城を舞台として合戦が行われている。また、第二次討伐では、五月に新田氏の蜂起があり、その鎮圧のために、岩槻で戦闘を行っている。その際は、村岡から長井・吉見を経て、岩槻へと侵攻する。このように第二次討伐では、鎌倉府側は軍勢を、小山へ向かう軍勢と新田氏の鎮圧に向かう二つの軍勢に分けている。第三次の鎌倉府の軍勢は、粕尾に逃亡した義政の追討のために、村岡から吹上へと軍勢を進めている。その後、長野、櫃沢城において戦闘となり、義政の自害により、第三次討伐は、終結する。

第二章　小山義政の乱と太田庄

太田庄は、小山氏成立期から関係のある所領である。第二次討伐の際には、新田氏の蜂起と呼応し太田庄内では小山氏側の蜂起があり、武蔵国でも合戦を行っている。このように合戦の範囲が広範囲に拡大しているのである。太田荘は、「梅松論」[6]にみられるように小山氏にとって、重要な所領である。その太田荘は、小山義政の乱の際、合戦の舞台となり。また乱の推移とともに、太田荘は、小山氏のもとを離れていく。それは、小山氏にとって大きな損失となる。

おわりに

東国の争乱との期間比較すると、まず武蔵平一揆の乱は、応安元年（一三六八年）二月二十五日から六月月十七日までの約四ヶ月間。宇都宮氏綱の乱は応安元年（一三六八）閏六月から九月上旬までの約三ヶ月間。そして、小山義政の乱は、康暦二年（一三八〇）六月一日から永徳二年（一三八二）四月十三日の約二年間に亘っている。同時期に起きた東国の騒乱と比較しても、期間が長く大規模であるといえる。また、太田荘周辺での合戦の事実から、広範囲な地域にでの合戦であったことが指摘できる。また、乱後、小山氏に関係のある太田庄が鎌倉府の直轄領として機能している。[7]鎌倉府権力の安定のためには、太田庄の掌握し東国の中央部に影響力の持っていた小山氏を討つ必要があった。このように小山義政の乱は、鎌倉府権力確立過程のなかで大きな転換点といえる。

註

(1)磯貝富士男「小山義政の乱の基礎的考察」『小山市史研究』六、一九八四)
(2)市村高男「鎌倉府体制と結城・小山一族」(『北下総地方誌』創刊号、一九八四)
(3)江田郁夫「小山義政の乱をめぐる諸問題」(『室町幕府東国支配の研究、高志書院　二〇〇八、初出一九九〇』)

(4)小国浩寿『鎌倉府体制と東国』（吉川弘文館、二〇〇一）
(5)杉山一弥「小山義政の乱にみる室町幕府と鎌倉府」『栃木県立文書館・研究紀要』第十四号（栃木県立文書館、二〇一〇）
(6)「梅松論」『群書類従　第二十』建武二年十二月十日）
(7)山田邦明「鎌倉府の直轄領」（『鎌倉府と関東』校倉書房、一九九五）